

守
対談
破
創

石田審議委員がゲストにお迎えしたのは、日本の声優・ナレーター界を代表される羽佐間道夫氏。羽佐間氏は、大ベテランとなった現在でも、精力的にTVや舞台で活動しており、後進の指導にも力を入れている。石田審議委員との間では、声優やナレーションの話題ばかりでなく、声と健康の関係、ご先祖の赤穂浪士のエピソード、銀行との付き合い方やコミュニケーションの秘訣など、幅広いテーマで話が弾んだ。



日本銀行政策委員会審議委員

石田浩二

Koji Ishida

1947年神奈川生まれ。1970年(株)住友銀行入行。有楽町支店長、資金為替部長、常務執行役員企画部長、(株)三井住友銀行常務執行役員経営企画部長、常務執行役員本店第一営業本部長、(株)三井住友フィナンシャルグループ代表取締役常務取締役、代表取締役専務取締役、三井住友リース(株)代表取締役社長などを歴任し、2007年三井住友ファイナンス&リース(株)代表取締役社長。2011年より日本銀行政策委員会審議委員。



株式会社ムーブマン代表取締役・声優・ナレーター

羽佐間道夫

Michio Hazama

1933年東京生まれ。舞台活動の後、放送界で、主に声優として活躍を続ける一方で、俳優の社会的向上を目的とする、日本俳優連合の副理事長を経て、現在声優を育むプロダクションの会長として、後進の指導に当たり、最近は無声のチャップリン映画等を、声優によって有声にするライブ活動などのプロデュース、脚本制作、出演を積極的に行っている。全日本テレビ番組製作社連盟からナレーションにおける個人賞、声優アワードから功労賞等を受賞している。

難しいことをやさしく、
やさしいことを深く

声優は塗り絵師。
自分のパレットに
多彩な色を持つ

石田 日本の声優界を代表される羽佐間さんに、まず、わが国において「声優」という分野がどういう形で始まったのかという「声優の起源」から、お伺いしたいと思います。

羽佐間 日本でテレビ放送が始まったのが一九五三年です。今も昔も、映画は有力なテレビ放送のコンテンツですが、当初は日本の映画会社のテレビへのライバル意識が大変強く、邦画をテレビで放送することが難しかったのです。

そこで、ハリウッドから外国映画を購入することになりました。最初は映画館同様に字幕を使いましたが、ブラウン管も小さく、解像度も低く、「魑魅魍魎」といった字幕は、団子にしか見えません。濁音、半濁音も見えにくいため、名作映画の『雨の朝パリに死す』が「雨の朝ハリに死す」となってしまいます。

そうした中で、ラジオの放送劇団の人達や、新劇の若手研究生クラスの人達を集めて吹き替えをやってみようということになったのです。

石田 新劇俳優だった羽佐間さんが声優の世界に入られたのは、そういういきさつがあったのですね。

羽佐間 ええ。そのうち声優の巧者が出てきました。例えば『刑事コロンボ』の小池朝雄さん。小池

さんの声に馴染んだファンが、(俳優本人である)ピーター・フォークの声を聞いて「あれはコロンボの声じゃない」云々というように、吹き替えにファンが付くようになりました。愛川欽也さん、藤岡琢也さんなどが、声優として活躍しだしたのです。

石田 声優というお仕事をご自身ではどのように捉えておいでなのでしょうか。

羽佐間 声優は塗り絵師のようなものです。一つの画があつて、形がすべて決まっているとところに、色合いを付けていく。ストーリーの枠は決まっていますが、しゃべり方でニュアンスや雰囲気はがらりと変わります。ですから、私達は、自分のパレットの中にいろいろな色を持っておき、その場その場で最適な色を使って立体的な絵にしていかなければいけないのです。

石田 これまで数え切れないほど多くの役柄を演じて来られました。個性も雰囲気も異なる俳優の

吹き替えをどのように演じ分けるのか教えて下さい。

羽佐間 私の場合、画面に出てくる役者の呼吸に自分の呼吸を合わせます。『ロッキー』(注1)のシルヴェスター・スタローンでは、めまいを起すくらいにボクシングの息遣いに合わせました。そこに声の色合いを乗っけていくのです。『ピンク・パンサー』(注2)のピーター・セラーズは、テンポの速いしゃべりですが、『ロッキー』の場合は逆です。その抑揚などの使い分けは、やはり芝居をやってないとなかなかできない技だと思いますね。

初期のテレビ映画では、アボットとコストロの『凸凹コンビ』(注3)など、コンビの喜劇が流行ったものでした。喜劇のテンポ、リズムを訓練した翌日にシリアスな役が待っていることもありまして。こうした役柄の千変万化に付いていくためには、声の色合いをたくさん持つていなければいけません。そこで、浄瑠璃を観たり、落語を聴いたり、歌謡曲を聴いたり、本を読んだり、電車の乗客ウオッチングをしたり……、声の引き出しを増やすために懸命に頑張りました。

石田 テレビ局が声優やナレーターのカスタイングに困ったとき、羽佐間さんに頼めば何とかするというところで「困ったときの羽佐間」と言われていたそうですが、そんな羽佐間さんでも流石に困った役、一筋縄ではいかない役はありましたか。

羽佐間 それはもう『ロッキー』に尽きます。どうして私に役が回ってきたのか未だに分かりませんが、主役を演じたシルヴェスター・スタローンの胴間声に近づけようと、海岸に行つて浄瑠璃をうなたりして声のトーンを落としたものです。

反対に、軽妙洒脱な役のときには、家の中でも声のトーンを上げてしゃべっています。日常訓練の中にそういうものも取り込んでいます。

石田 ナレーターとしても活躍されていますが、声優とはやはり違った世界なのではないですか。

羽佐間 一口にナレーションと言つても、何を目的にするかで、スタイルが全然違います。私はナレーションは二つのタイプに分けることができると思います。

一つはアナウンサースタイルで、正確に、明確に「事実」を伝

えるというものです。

一方、私のようなタイプは、「気持ち」や「空気感」を伝えるナレーションです。言ってみれば、芝居のせりふのようなナレーションですね。

環境が及ぼす

「芸の道」への影響

石田 話は変わりますが、お兄様が高名なスポーツアナウンサー羽佐間正雄さんで、ご親戚には三浦環(注4)さん。そうしたご一族の背景も、声を使う演技者の道に進む上での後押しになったように思いますか。

羽佐間 それはどうでしょうか。三浦環さんについては、演技・演奏の前に身体をリラクセスする技術として「いつも舌を真つ平らにしてお話し下さい」と東京藝大で指導した記録が残っていると聞いたくらいで、直接の接点はありません。

家族は、父が私が七歳のときに亡くなっていますが、母と叔父は、日本の伝統芸能、小唄、長唄、琴、尺八、何でもやれた人です。それを小さいときから聴いていた影響はあるかも知れませんね。

石田 ところで、ご先祖様が有名

(注1) 一九七六年のアメリカ映画。主演・脚本は当時無名だったシルヴェスター・スタローン。アカデミー作品賞受賞作。

(注2) 一九六三年に制作が開始され、世界的にヒットしたアメリカ(途中からイギリス)のコメディ映画シリーズ。

(注3) 一九四〇年から五五年頃まで一世を風靡したアメリカのお笑いコンビで、彼らの身長差から日本では凸凹コンビと呼ばれた。

(注4) 一八八四年東京生まれ。日本で初めて国際的な名声をつかんだオペラ歌手。

な赤穂浪士だそうですが……。

羽佐間 三百年前の話ですから、文献はあっても実感はありません。わずかに本家に伝えられたのは吉良上野介に一番槍をつけた槍です。祖先の間十次郎(光興)が吉良邸内の炭小屋に隠れていた吉良を偶然発見したのですが、もし素通りしていたら吉良は生き残って『忠臣蔵』は作られなかったかも知れません。歴史はちよつとした偶然で変わってくるのかなと思います。なお、その槍は赤穂浪士ゆかりの泉岳寺に寄贈しております。

健康の秘訣は食・呼吸法・明るさ

石田 心身ともに極めて快調とお見受けしますが、いつも大変お元気なその秘訣を教えてくださいませんか。

羽佐間 私は今七九歳です。「若い」とよく言われますが、仕事を生きがいにする以外に、特別なことをしているつもりはありません。あえて言えば、食事については、納豆、豆腐、油揚げなど、豆から作られたものを一生懸命食べています。

それから声を維持するために、「三吸い・二止め・一五出し」と

いって、三つ吸って、二止めて、長い時間を掛けて息を吐く呼吸法を心掛けています。酸素を体の中に取り込む訓練ですね。不健康だと声が弱っていきます。ぴしつと声が出ていない状況は、必ずどこか具合が悪い。声を出すのは一種のストレッチです。これで血行を良くして、平常心を保つ。

あとは、悩まないことですね。**石田** 悩みはあるけれども、悩みにしない？

羽佐間 会社経営にかかわっていると「嫌だな」と思うことはたくさんあります。それを次の日に持ち込まないよう意識しています。そして、他人様と会うときには明るくふるまうことです。テンションを高めて陰にこもらせない。これが大切です。

磨けたらおだてまんねん——これで人は育つ

石田 コミュニケーションの手段に声が果たす役割は大きいと思います。どのようなところに気を付けたら良いのでしょうか。

羽佐間 まず、母音を明確に発音することが基本です。そして初めは相手の呼吸に合わせて話し、次第に自分のリズムに乗せて

話していく。これがポイントです。お医者さんはそういうことが訓練されています。私たちは病気になるると暗い気持ちになります。医師は暗いトーンに合わせて「どうしました？」から始まり、途中から「そう、それは良かったね」とだんだん明るい調子に上げていく。自然にそういうコミュニケーションを取っていますね。

コミュニケーションには「ユーモア」も重要です。話の間にユーモアが加われば、相手との距離も一層近づきます。ユーモアの種は、落語や漫才などの伝統芸能の中にもありますが、私は、どっちかというフランス小ばなしが好きで良く読んでいます。

石田 日本声優界の大御所として、プロダクションの経営者として、後進の育成にも取り組まれています。その際にコミュニケーションで大切にされていることは何でしょうか。

羽佐間 藤山寛美さんのお師匠さんの二代目渋谷天外さんにインタビューする機会がありました。「あの名優をどう育てられましたか？」と訊くと、「おだてまんねん。おだてたらようなりまんねん」。「お弟子さん皆をおだてるんですか」

と訊くと、「才能のない者をおだてたってあきまへん。磨かなあきまへん。磨けたら、次におだてまんねん。『ええなあ、ええなあ』と言うと、どんどんようなります」とおっしゃいました。

教育というのは、上から教えるのではなく、その人の次元までぐつと下がって相手を理解し、同じ立場でお互いに教えあうということが肝心です。後進の人達の中には、びっくりするほどすばらしい才能の人がいます。彼等が何か良いものを出した時は、それに対して、「ありがとう。今のもらうわ」と言うと、向こうももう一度私をギヤフンと言わせてやろうとまた勉強してくる。そうやって良い循環が生まれるのではないのでしょうか。

日本文化が経済情勢とともに衰えていくことを憂う

石田 声優や声の話と少々離れますが、企業経営者として、金融機関に対して、どんなイメージをお持ちですか。

羽佐間 俳優の組合を作った二八歳のとき、今のお金にして約一億円を持ち逃げされました。お金がないので税金を納めることもできません。担保もなく、途方にくれ



ています。

石田 最近の社会・経済の情勢について、長い経験から感じるものがあればお聞かせ下さい。

羽佐間 テレビ番組で言うのと、最近は大人が観たいと思うものが少なくなりました。それはやはり経済的な裏付けが薄くなってきたからでしょう。昔は一年かけて番組を作ることもありました。チャップリンは、一カットを「気に入らない」と七二〇回も撮り直したといえます。今の経済情勢ではそうしたコスト度外視の番組作りは望むべくもありません。

もちろんコストさえかければいいものが作れるというわけではありませんが、経済とともに、日本の文化も衰えてきているのではないかと、何とかしなければならぬ、という思いは常にあります。

石田 羽佐間さんが、チャップリンの無声映画にライブでせりふを付ける企画を進めておられるのも、そうしたお気持ちからですか。

羽佐間 ええ。バスター・キートンやハロルド・ロイド(注5)、チャップリンは、日本の喜劇の原点でもあります。そのパロディーから、数々の冗談音楽やショートコントが生まれました。

私共のこの企画では、私を含めた声優が、劇場でサイレント映画にせりふを付けていきます。音のないサイレント映画を立体化して、現代のお客さんに名作を楽しんでもらうというライブ企画です。私は舞台出身ですから、舞台空間でお客さんと触れ合いながら、昔の映画の魅力^{よみがえ}を蘇らせていくのは本当に楽しい。この試みは長く続けたいですね。

難しいことをやさしく、やさしいことを深く

石田 折角の機会ですので、日本銀行についてどんなイメージをお持ちか教えて下さい。

羽佐間 正直に言うのと、日銀には冷たいイメージ、難しい数字がいっぱい出てくるイメージがあります。一般の銀行では、日頃の銀行員との接触のなかで、その銀行の個性や温もりのようなものを感じられますが、日銀には普段行きませんし、日銀職員と話す機会もなかなかないからかもしれません。一般の人が気軽に日銀に触れ合えるように、「日銀フェスティバル」のような催しをやったらどうでしょうか。

大勢の人が楽しめる日銀のお祭

りのようなものをやったら印象も変わると思います。

石田 これまでも地元とタイアップして本店で市民講座などの広報イベントをやったり、貨幣博物館で企画展をしたり、普段から行内見学ツアーを開催したりしていますが、今後も一般の方々に親しみを持って頂けるよう努めていきたいと思っています。

最後になりますが、何かお好きな言葉をご紹介します。

羽佐間 私が常日頃心がけているのは、作家の井上ひさしさんの言葉です。

「難しいことをやさしく、やさしいことを深く、深いことを愉快地に、愉快なことをまじめに」

これは文学や芸術に限らず、全てのコミュニケーションの場において——例えば、金融や経済を語るときにも——通じることではないでしょうか。

石田 本日は、楽しく有意義なお話を色々お聞かせ頂き、ありがとうございました。日本銀行は本年十月十日に開業一三〇周年を迎えました。私共も新たな歴史に向けて、皆様方に『難しいことをやさしく、やさしいことを深く』お伝えしていきたいと思えます。

ながらある金融機関に行ったところ、「担保がないのでは本来お金を貸せませんが、人材はおりますね。私はあなたの会社ではなく、あなたにお貸しします。だから、あなたが責任を持って返してください」。

この銀行員の方とは今でも交流を続けています。銀行と企業の付き合いでも、最後は、人と人との信頼と信用こそが大切なのだと学びました。バブル時代には、私もそれに乗って少々借金をこしらえました。金融機関との信頼関係がありましたので、ここまでやってこられました。

もつとも、借金を返そうと必死で働いたことも健康を保つことに繋がったのかも知れません。失敗も悪いことばかりではないと思っ

(注5) アメリカのコメディアン。一九二〇年代に主に活躍したサイレント映画の大スターで、日本ではチャーリー・チャップリンやバスター・キートンと並ぶ「世界の三大喜劇王」と呼ばれる。